

新収蔵資料展Ⅱ

昭和前期 能代の俳句界

小笠原洋々の時代

令和7年

6/1日～7/31木

◆開館時間 午前10時～午後4時

◆休館日 毎週月曜

◆観覧料 無料

新収蔵資料展Ⅱ関連講演会

「戦時下の秋田俳句界 小笠原洋々を中心に」

講師 当館顧問 京極雅幸

日時 令和7年6月8日(日曜日)午後1時30分～3時

定員 20名

参加費 無料

お問い合わせはあきた文学資料館まで

あきた文学資料館

〒010-0001 秋田市中通6丁目6-10

☎018-884-7760

昭和前期能代の俳句界 小笠原洋々の時代



おがさわらようよう
小笠原洋々(1880-1961)

小笠原洋々(本名・栄治)は、明治13年に農家の二男として旧二ツ井町に生まれました。十代から俳句の道に入り、明治33年に能代で日本派の俳誌『俳星』が創刊されると、その活動に加わります。一時期は『俳星』の編集にも携わりました。

明治大学に進学するために上京した洋々は、明治35年1月に「近代俳句の父」と称された正岡子規のもとを訪れています。子規との面会はこの一度きりで、この年の9月に子規は他界。子規没後、洋々は子規の住まいであった東京・根岸庵にて行われた子規四十九日忌句会や、一周忌追善句会に出席しました。この頃、洋々は河東碧梧桐が中心となっていた海紅堂句会や東京俳句会に参加するようになり、新傾向俳句へと転換。大学卒業後は、福岡を皮切りに仙台、札幌の鉱山監督署に勤務しながら句作に勤しんでいます。

大正2年に再び福岡に赴任しますが、翌年7月に社団法人北海道石炭鉱業会社が創立されると、洋々はその書記(のちに主事、常務理事)として北海道へ渡りました。大正8年には、ワシントンで行われた第1回国際労働会議に労働代表顧問として出席しています。また、大正期は札幌印刷株式会社の取締役や、北海道庁立札幌工業学校での教職にも就くなど、職業人としても活躍しました。

昭和期には新傾向から伝統俳句に回帰していた洋々は、昭和11年、『俳星』第五代主幹となります。ここに至るまで『俳星』を取り巻く環境は、約14年にもわたる休刊(のちに『「俳星」再現』として復刊)、『俳星』を生んだ石井露月や島田五空の死など、波乱に満ちたものでした。やがて時局は戦争へと突入し、様々な物資が不足するようになります。紙の供給も統制され、国家による出版統制のひとつとして新聞や雑誌の統合が行われました。『「俳星」再現』もその影響を受け、昭和19年5・6月合併号をもって休刊となります。また、昭和20年洋々は空襲で東京にあった自宅を失い、故郷の二ツ井に帰りました。

戦後、洋々は県内俳句界の中核の一人として活躍します。昭和21年に再刊された『俳星』では、25年12月まで引き続き主幹を務めました。昭和22年、二ツ井では洋々を中心に白水会が創設され、毎月3回例会を実施しています。また、昭和24年に渠水会を結成し、28年には俳誌『万籟』を創刊しました。『万籟』は、洋々の晩年となる昭和36年1月に145号をもって終刊となるまで発行されています。この年の2月に82歳で亡くなるまで、洋々は多くの後進の指導に当たり、県内俳句界に大きく貢献しました。